

## 閉会に当たって

湯沼 誠二

ふと考えてみますと今集会（第25回国際日本文学研究集会）は、21世紀最初の集会でした。もちろん華々しいことは何もありませんでした。これまで続けてこられてきた流れに沿うようにして今集会も始められそして終わりました。この流れとはいったいどのようなものだったのでしょうか。

〈受容〉という観点から申しますと、外国文学を、〈受容〉し始めた古代中古の時代から近代現代に至るまで、その相は一樣ではありません。〈影響〉という観点から考えると、より複雑になってまいります。〈翻訳〉という観点から考えますと、さらに言語の問題を抱えこみますので別の視点からも考えてみなければなりません。このような諸問題を孕みつつ日本の歴史を歩んで来た日本文学は、もともと国際的であったのです。

今回のテーマは「造形と日本文学」でした。招待発表が2つ、研究発表が7つあり、映画・絵画・挿絵・風俗画・葦手絵・舍利・箱・根付など造形と文学の関わりからの研究を発表していただきました。ひじょうに興味深い新見および知見が明らかにされ、最近のこの集会の中でもレベルの高いものの一つでした。

日本文学が世界に向かって発信され、しかも発信される作品が多様になったのは戦後になってからでした。他方で昭和50年代に日本語論・日本人論が大流行いたしました。昭和56年9月25日から10月30日にかけて開催された第50回朝日ゼミナールは、そのテーマに「日本語と日本人」を掲げましたが、このゼミナールが予告されるやいなやたちまち受講定員に達したという当時の状況が如実に物語っています。この当時のこうしたテーマは主に日本人自身の興味の対象になっていましたが、やがて多くの外国人学者やジャーナリストも参入して来ました。この根底には「自分はどう見られているのか」とか、いわゆる「外

圧を気にする」日本人の国民性があると指摘するむきもありますが、いずれにしても、〈日本〉がテーマとなって真正面から取り上げられ、意識的に考察の対象となったというのは画期的な出来事でした。

さてこの集会では、私の知るかぎり、満員御礼の垂れ幕をぶら下げなければならぬようなことはありませんでした。国際交流あるいは国際理解ということとは、様々な方法とその結果を予想します。多様で多層的であることがむしろ望ましいのです。その中でも日本文学を通じてのそれは計り知れないものがあります。アーサー・ウェイリーが1925年から1933年にかけて翻訳し6巻本として刊行した“The Tale of Genji”は、その傑出した成功例です。第1巻（「桐壺」「葵」）が世に出るや英国や米国の批評紙はこれを絶賛し、小説は近代から書き始められたという西洋文学史の常識を覆し世界文学史を書き換える程のインパクトを与えました。この重訳がスウェーデン語に、フランス語に、オランダ語に、ドイツ語にそしてイタリア語にと相次いで出され戦前ヨーロッパにおいて出版されたに本関連の書物の中のベストセラーになったのです。『源氏物語』の魅力は、戦後になっても変わりませんでした。日本文学の翻訳家として多大の貢献をされてきたサイデンステッカー氏による“The Tale of Genji”2巻本が刊行され、この流れは欧米だけでなく、中国においても豊子愷訳の3巻本、台湾の林文月訳の2巻本、韓国においては柳呈訳2冊本が刊行されています。そして国際日本文学研究集会においても、この千年の時空を超えた古典が、くりかえし研究対象として発表されています。

研究はすべての時代にわたり、その対象は多彩です。それらが日本人研究者だけではなく**海外研究者**によって担われているという事実の重みこそ、その流れの顕著な一つとして指摘しておかなければなりません。しかも彼らはたとえば『源氏物語』においては、時間の流れにおける闇の深さや、その中で響く音や声のくぐりまでも読み取っています。それはたとえば親子二組の夫婦が同居しているところに離婚した娘が子どもを連れて出戻って来るという状況の中で、微細な神経を使いながら生活するという川端康成の『山の音』の世界が描

く日本人の暮らしの息づかいさえ理解しているのです。彼らはまさに文学の研究者なのです。しかも異国から渡来したものに対する日本人の〈受容〉や〈反応〉のパターンからではない、むしろ日本人のこわばりやこだわりから逃れた自由な認識作用で日本文学を解読しようとしている人々が集まって来る稀有の学会であるということです。したがってあるときにはあまりにも長すぎる日本文学の伝統を、世界の中にいったん解き放ち、その後日本人が気付かない新しいコミットメントを示すというのも、この集会ではしばしば見られる現象です。コミットメントの対象は古代から現代までに及んでいます。また海外研究者と日本人研究者の率直な議論によって文学研究のストイシズムと確立しようとする気風です。時には今集会の葦手絵の発表時に起こったように、フロアからの意見が、ある文学的課題を解決するというほほえましい交流も、この集会ならではの出来事でしょう。さらに内外若手研究者の登竜門の役割を十分に果たしています。彼らの中から、真に日本と日本人を理解したすばらしい文化外交官が輩出するのです。そしてまた、日本の他の学会の枠内では、その発表のテーマや内容が収まらないという性格の発表が、この集会では取り上げられるというのもまた大きな流れの一つであります。つまり開会挨拶で松野館長がお触れになった「日本の中だけで日本文学研究が行われているわけではなく、海外研究者の研究も積み重ねられている」というかたちでの日本文学に発信が行われてきたということこそが、この集会の本流なのです。そして昨夜のレセプションで小池先生がいみじくも語られたように、このようなかたちの国際交流・国際理解こそが大切なのです。なぜなら、この集会からは大仰な、それでいて修辞の遊びのような日本人論や日本論は決して生まれて来なかったからです。そしてこれからも生まれてこないでしょう。

さてその日本文学が今〈「J文学」などと称されてあまたの文化事象の片隅に追いやられてしまっている〉(公開講演資料)とお述べになったのは、木越先生の公開講演でした。われわれはこの集会の鯛や鮒の舞い踊りに甘美な時を費やし過ぎたために、もしかしていざ玉手箱を開けたら一筋の煙りも出なかつ

た状況を忘れていたのかも知れません。先生は〈学生たちに向かって語〉ることの大切さを述べられました。ここに集われる内外の研究者は、ほとんどすべてが学生達に語りかけるポストにおられます。これこそが忘れてはならない重要な流れの一つではないでしょうか。

ドミニク・サンピエロの詩に次のようなものがあります。

決して壊せないものがある  
肉体の中に 大地の中にあるものだ  
この大地に ひとつひとつ  
小石を積んだ  
父が祖父が積んだのだ

雨にも 風にも耐えて  
積み重ねた夜には  
月光が影を作るように盛り上げた  
ソリの遊びができ 星にも届くようにと  
高く積んだ小山だ  
子供たちにその事を語ろう

子供たちに語ろう  
先人たちや 父たちから引き継いだのだ  
その小山と 彼らの勇気とを

(映画「今日から始まる」字幕より)

今日発表された全ての方々また御講演をさせていただきました両先生にお礼申し上げます。21世紀の国際日本文学研究集会は今日からまた始まりました。